



実践と理論の融合をめざして

「教育実践研究」成果発表会 大学院での学びを20名が発表

2月21日、教職大学院生による研究成果の発表会が開かれた。発表数は全20本。実践と理論の融合をめざした多様な考察や方策等がプレゼンテーションされ、熱心な質疑応答がなされた。

三上次郎副学部長は閉会のあいさつの中で、「教職大学院が求められているものは、新しい学校づくりの有力な一員となれる新人とスクールリーダーとなるような現職教員の育成です。この成果発表を最後として大学との関係がなくなるのではなく、日々変化する「教育現場」に対応できる、学び続ける先生をめざし、確かな成長を続けていただきたいと思います」と発表者に対しエールを送った。

教職大学院は、研究期間によって1年プログラム、2年プログラム、3年プログラムに分かれる。基本的に、現職教員の場合は、在職のまま1年プログラムまたは2年プログラム、教員免許状を有しているが教育経験のない学士の場合は、2年プログラム、免許状を取得していない学士の場合は3年プログラムで学修を積み重ねる。彼らは、子ども理解・特別支援教育実践コース、学校運営・授業実践開発コース、(今年は発表者がなかったが)理科・ICT教育実践コース、国際理解・英語教育実践コースのコースにそれぞれ分かれ研鑽を積んできた。発表された研究が生きて働き、学校現場でよりよい教育を推進するものとなることを祈りたい。

入学を希望する方は下記「募集」コーナーを参照してください。意欲ある方々の入学を期待します。

成果発表から

特別なニーズを要する児童が在籍する通常学級における学級適応力の育成に関する実践

子ども理解・特別支援教育実践コース 佐々木洋光

■KEYWORD 学級適応力、社会的能力、協同学習、構成的グループエンカウンター

本実践では、社会的能力の面で特別なニーズを抱える児童を含めた学級一人ひとりの適応力の育成を図ることをねらいとした。方法は、観察とQ-U調査を通して明らかになった課題をもとに「他者との関わり」に関する社会的能力に焦点を当て、学級全体にSGEによる介入を継続的に行った。またそこで培った社会的能力を活用した国語科における協同学習の在り方と効果の検討を図った。その結果、Q-U調査の比較では、学級生活満足群に属する児童が増加し、非承認群、侵害行為認知群は大きく減少した。また、「他者との関わり」で課題が見られた4名の児童は、内2名が生活不満足群から生活満足群へ移行し、観察においても他者との関わり面で大きな改善がみられた。さらに、要支援群と支援無し群を比較すると「協力」に関する項目で差が縮まっていることが分かった。今後も、協同学習を中心に据えた指導の方策を様々な場面や教科指導で検討していく。



SASAKI Hiromitsu KOGA Yoshiko

児童の学級適応力を高めるための教育的介入の実践—児童の実態に応じた絵本の読み聞かせと授業実践の融合—

子ども理解・特別支援教育実践コース 古賀 喜子

■KEYWORD 学級適応力、絵本の読み聞かせ、SGE、SST

本実践研究は、児童の学級適応力を高めるための教育的介入を行った。児童の実態把握として、行動観察と2つのアンケートを導入し、ターゲットスキルを「承認」と「友人関係」とした。この2つを今回の実践研究のテーマとし、絵本の読み聞かせ、授業実践 (SGE-SST)、定着化、気になる児童への個別の支援を実践した。その結果、Q-Uアンケートの学級平均が「非承認群」から「学級生活満足群」へ良好に変化した。多重比較検定においても「承認」と「友人関係」において有意に上昇した。このような児童の変容は、児童の実態に応じた絵本を選書し、継続して読み聞かせを行ったこと、授業実践、定着化が効果があったと示唆される。このように、本実践研究においては、児童の実態に応じた絵本の読み聞かせと授業実践の融合の教育的介入は児童の学級適応力を高めるために有効であったといえる。ここで得られた成果を今後も教育現場で生かしていきたい。

特別支援学校小学部に在籍する一自閉症男児の行動問題への応用行動分析を用いた指導

子ども理解・特別支援教育実践コース 福田 和代 (県立虹の原特別支援学校)

■KEYWORD 自閉症、行動問題、ひっつき行動、場面間多層ベースラインデザイン、ABCアセスメント

重度知的障害の自閉症男児1名に、場面間多層ベースラインデザインに似せた方法で、ひっつき行動を標的行動とする指導を行い、それを低減、消失させることができた。事前アセスメントでは教師への聞き取り、MAS、一日の学校生活の行動観察 10 セッションを行い、2つの生起要因 (教師との距離の近さ、教師との関係の持続希求) に対応した指導を4場面で行った。また、指導と並行して行った事中アセスメント (一日の学校生活の行動観察) で判明した新たな2つの生起要因 (特定生徒の存在、尿意) に対応した指導を2場面追加した。行動問題の効果的な指導のPDC Aサイクルを実現するには、応用行動分析の技法を用いて、入念なアセスメントを行い、指導の立案、実施、評価を教師間で協働して行う体制を確立するのがよいこと、また、行動問題を低減させ、本来の学習活動に取り組みよう、まず、環境調整による介入を試みるのがよいことが示唆された。



FUKUDA Kazuyo KISHITA Kouichi

子どもと共にルーブリックを作成することによる自己評価力の育成 —P・R・E・C・Kアプローチを通して—

学校運営・授業実践開発コース 木下 功大

■KEYWORD ルーブリック、自己評価力、協同学習、パフォーマンス評価

「P・R・E・C・Kアプローチ」(パフォーマンス課題 Performance, ルーブリック Rubric, 評価 Evaluation, 協同 Collaboration, 知識 knowledge) は、ルーブリックを中心に他の4要素と複合的に機能させながら学習内容を習得させる方法の構造化を試みたものである。本研究では、子どもと共に評価基準 (ルーブリック) を作成することにより目標を内面化させる活動とPRECKアプローチを実践することで、学習内容の定着が図れるという仮説の検証を行った。単元テスト・パフォーマンス課題の評価結果から、学習内容の定着を見取れた。要因として、教師・児童の双方が指導の展開や学習状況の振り返り、協同の方法等々、これまで戸惑っていた部分を明確にしながら単元学習を進められたと考える。ルーブリックを他の指導と組み合わせることで、学習環境を整えながら一貫した学習指導を実現できることがわかった。課題となったルーブリック作成時の客観性の保持等を改善しつつ、継続した実践を行いたい。

歴史を大観して捉えさせる授業

—学習内容の構造化とシンキングツールの活用—

学校経営・授業実践開発コース 貞松 孝明

■KEYWORD 歴史を大観する活動、学習内容の構造化、シンキングツール

歴史的分野の学習は、個別事象の並列的な提示と記憶に傾いているため、他の地理的分野や公民的分野に比べ多面的・多角的な視点で考察しづらい傾向にある。そこで本研究では「歴史を大観する活動」に焦点を当てた実践授業を行い、多面的・多角的な視点で歴史を捉えさせることを目指した。実践授業を行うにあたって、「学習内容の構造化」を図り学習内容同士の関係性と単元に対する見通しを明確にすること、コンセプトマップをはじめとする「シンキングツール」を活用し事象間の関連を視覚的に捉えさせること、以上の2点に留意して授業を設計・実施した。実践授業終了後には、生徒はコンセプトマップによって事象間の関連を的確に捉えることで、学習した時代を多面的・多角的に捉え説明することができるようになった。また生徒アンケートでは、「覚える学習」から「考える学習」へと生徒の意識の変容が見られた。本研究の成果を今後の実践に生かしていきたい。



SADAMATSU Koumei MIYACHI Futoshi

読解速度と内容理解の度合いの向上を目指した英文音読指導の授業実践研究

国際理解・英語教育実践コース 宮地 太士

■KEYWORD 英文音読、言語処理の自動化、英文読解、wpm

本研究では、長崎県立X高校3年生の英語の授業で、事前テスト、英文の内容理解後の大量の音読活動を含む授業実践 (全5回)、事後テストを行い、黙読時の読解速度と英文の内容理解の度合いの変化を検証した。授業実践とテストの題材は、実用英語検定準二級レベルの英文を採用した。テスト結果の分析により、対象生徒の1分間の平均読解語数 (読解速度) が向上した点、特に事前テストで平均読解語数が下位に位置した生徒の読解語数の向上が顕著であることが確認された。他方、一定時間内における内容理解の度合いの向上については、確認できなかった。期待された効果の全てを検証できなかった主な要因は、事前・事後テストのテスト問題水準の不統一と、十分な音読練習量の確保ができなかったことにあると考えられる。読解テストの信頼性と妥当性をより厳密に検討するとともに、1時間の授業において十分な音読練習量をいかに確保するかが今後の課題である。

発表者とテーマ

【3年プログラム】

- 1 桑野 友裕
学習指導の内容を踏まえた運動部活動指導の研究
—自己指導能力を育む運動部活動指導—
- 2 古賀 喜子
児童の学級適応力を高めるための教育的介入の実践
—児童の実態に応じた絵本の読み聞かせと授業実践の融合—
- 3 寺田 充希
特別支援学校におけるキャリア教育
—職場に必要な人間関係形成能力の授業づくり—
- 4 峰 希美
児童のコミュニケーション能力を育む授業の研究
—特別活動と外国語活動の横断的学習を通して—
- 5 中村 麻美
小学校外国語活動における効果的なインプットの在り方についての研究
—音声と意味の統合を目指して—
- 6 宮地 太士
読解速度と内容理解の度合いの向上を目指した英文音読指導の授業実践研究

【2年プログラム】

- 7 大浦 理麻
個々のニーズに応じた計算指導の実践研究
- 8 佐々木洋光
特別なニーズを要する児童が在籍する通常学級における学級適応力の育成に関する実践
- 9 田原 智志
ものづくりを通じた協同学習による自己肯定感の育成
—協同製作を取り入れた授業づくりを中心に—
- 10 八田 佳子
望ましい人間関係を育むためのクラスワイドな支援の実践
- 11 岩尾 勇希
郷土愛を育む道徳教育の研究
—登下校を活用した実践の提案—
- 12 木下 功大
子どもと共にルーブリックを作成することによる自己評価力の育成 —P・R・E・C・Kアプローチを通して—
- 13 貞松 孝明
歴史を大観して捉えさせる授業
—学習内容の構造化とシンキングツールの活用—
- 14 吉田 誠也
「教えて考えさせる授業」における ICT 活用の効果に関する研究
—算数科での習得段階に焦点を当てて—

【1年プログラム】

- 15 佐々木有夏
まとまりのある英文を書く力を高める授業づくり
- 16 前田 悠太
活用に結びつけるための英文法指導の在り方について
- 17 岩坪 和美
英語の授業で積極的に取り組めない生徒に対する支援のあり方についての実践研究
- 18 浦山由美子
小学校から中学校への学校移行に伴う不適応行動軽減への取組
—中学校入学後の生徒とのかかわりを通して—
- 19 佐藤 一郎
高校生の進路意識に関する実践的研究
—ロール・レタリングの手法を用いて—
- 20 福田 和代
特別支援学校小学部に在籍する一自閉症男児の行動問題への応用行動分析を用いた指導

募集

大学院への入学を希望される皆様へ

本大学院では、大学学部卒業生をはじめ、現職の先生方が在職のかたちのまま学んでいらっしゃいます。当ニュースレターに記載されているように、学ぶ意欲に満ちた方々の積極的な入学をお待ちします。

教職実践専攻(教職大学院)
……募集人員 38 人

専門職学位が取得できます。この専攻には「子ども理解・特別支援教育実践コース」、「学級経営・教育実践コース」、「教科授業実践コース」の3つのコースがあります。「教科授業実践コース」は、教科教育分野を拡充して、新たに平成26年度からスタートしたコースです。

試験期日
平成27年度の選抜試験は10月初旬の予定

出願期間
1年で修了する1年プログラムの希望者は8月初旬、2年あるいは3年で修了する2年・3年プログラムの希望者は9月初旬の予定
詳しくは下記に問い合わせください。